

第3版の序

処方される頻度の高いカテゴリーの薬ほど多くの類似薬があり、同じ疾患に対する治療薬でも作用機序の異なる薬や同じ系統の類似薬が数多く存在しています。その結果、「多くの類似薬からどの薬を選べばよいか判断が難しい」という意見が臨床の現場から数多く寄せられるようになりました。薬を適正に使用するためには患者さんの病態に合わせて、適切な薬を選択する必要があります、そのためには各々の薬の特徴をしっかりと把握する必要があることは言うまでもありません。そこで、日常診療で患者さんがしばしば訴える症状を選び、それらの症状を治療するために用いる薬の使い分けを解説した「頻用薬の使い分け」を2010年（とり上げた症状は13）、次いで改訂第2版を2015年（とり上げた症状は19）に出版しました。初版および改訂第2版では、日常診療でよく用いる頻用薬を対象にし、個々の患者さんの病態や合併症を考慮した適切な薬の使い分けを、多くの症例を用いながら、その根拠も踏まえて具体的にわかりやすく解説しました。

改訂第2版の発行よりすでに5年が経過し、その間に多くの新薬が登場し、さらに各種ガイドラインが改訂されたことより、薬物治療の内容も変わってきました。そこで改訂第2版の内容を最新の情報に改め、さらに治療の対象となる症状を20に増やし、より充実した改訂第3版を発行することにしました。執筆者はいずれも臨床経験の豊かな医師であり、個々の患者さんに対する頻用薬の使い分けについて現場の状況に沿った内容になっています。

臨床の場では、薬の有害反応が少なからず起きており、医師にはより適切に薬を使うことが求められています。本書が薬を適正に使用するときの情報源となり、安全な薬物療法が行われることを期待しています。

最後に、本書の企画・編集にご協力いただきました羊土社編集部の秋本佳子様にお礼申し上げます。

2021年6月

藤村昭夫